



ふたはの桂

2014.3

京都府大広報 No.173



CONTENTS

特集1 いよいよ開始！三大学教養教育共同化 ②

特集2 男女共同参画の取組 ④

トピックス

地域連携 ⑤ 国際交流 ⑥ 公開講座・生涯学習 ⑦

府大構内における発掘調査の成果から ⑧ 受賞情報 ⑨

各学部・研究科の取り組み

文学部 ⑩ 公共政策学部 ⑩ 生命環境科学研究科 ⑪

退職教員からのメッセージ ⑫

特集1

■いよいよ開始！三大学教養教育共同化■

京都三大学教養教育研究・推進機構

京都府立大学、京都府立医科大学、京都工芸繊維大学の三大学は、各大学の強み・特徴を生かしたカリキュラムを提供し、学生の多様な関心に応え、総合的に物事を観察し、的確に判断できる能力と豊かな人間性の涵養を図っていくため、平成26年度から全国初となる教養教育共同化をスタートします。共同化によって三大学の学生交流が促進され、下鴨・北山地域における新しい学生のライフスタイル、大学像が構築されることも期待しています。

共同化の趣旨

三大学は、それぞれ100年を超える歴史を持ち、国内外で活躍する有為な人材を多く輩出してきましたが、変化の激しい今日にあって、時代が求める新たな教養教育を構築していくため、次の3点をねらいとして取り組みます。

- ①三大学は個々には規模が小さく、各大学で提供できる科目には限りがあるため、各大学の強みと特徴を生かした科目を提供しあい、学生の科目選択の幅を広げ、学習意欲を一層高めること
- ②文系、理工系、医学系の専門分野や将来の志望の異なる三大学の学生が授業で混在し、多様な視点や価値観を交流して、一緒に学ぶ学修空間を創り出すこと
- ③学生間での交流や討論、共同学修が進むよう学生参画型の授業を広げていくこと

教育の目標

グローバル化や少子高齢化の進展など課題が山積する中で、多様な事象に関心を持ち、総合的に物事を観察し、的確に判断できる能力と豊かな人間性を持つ人材の育成を目指して次の3点から取組を進めます。

- A 人文・社会・自然諸分野の基礎を幅広く修得し、これらへの高い関心を育てる
- B 世界の人々の多様な生き方を感じ、豊かな人間性と高い倫理観を涵養する
- C 日々社会に生起する種々の問題において、真理や正義を探求する議論に習熟する

取組内容

1 京都三大学のリベラルアーツ系科目の共同開講

初年度の平成26年度は、共同化科目として、講義方式61科目（人文系21科目、社会系21科目、自然系19科目）、リベラルアーツ・ゼミナール7科目（人文系2科目、社会系5科目）の計68科目でスタートします。これらは三大学いずれの学生も自大学の授業として履修でき、科目選択の幅が2～5倍と大きく増加するとともに、諸分野をバランス良く履修することができます。また、大学間の移動など学生がより受講しやすいよう、月曜午後に集中して共同化科目を提供します。

2 京都学科目の開講

講義系61科目のうち10科目は、京都という地の地域的、歴史的、文化的特色を生かした「京都学」の授業を行います。そのうち1科目は「京都学事始—近代京都と三大学」として三大学の足跡をたどりながら京都の近代化とそれに果たした三大学の役割を概観するリレー方式の科目を新設します。

3 リベラルアーツ・ゼミナールの開講

学生同士が交流し、共通のテーマで対話し議論する力を育むことをねらいとした少人数のゼミナール科目です。考え方や学び方の基礎力を培うゼミナールやグローバルな視野を広げるゼミナールなど7科目を新設します。

4 取組の展開

学修状況や授業の成果、学生からの要望等を踏まえつつ、科目の拡大等共同化の更なる展開に向けて検討を進めます。また、従来から実施してきた三大学の教養教育単位互換の取組も充実を図りつつ継続します。さらに、講演会やシンポジウム等によって学外に向けて取組状況をお知らせし、また、生涯学習の機会としても提供していきます。

教養教育共同化施設（仮称）の建設

京都府が平成21年に策定した「北山文化環境ゾーン構想」の中で、京都府立大学は、植物園、総合資料館、コンサートホールとともに、文化・学術・環境地区を構成する一要素として位置付けられています。現在、本事業のために、鉄筋コンクリート3階建ての教養教育共同化施設（仮称）の建設が進んでおり、この施設を中心に、共同化科目の授業が展開されます。

1階には、三大学の学生が共同で学ぶための最大100～200名収容の講義室（計6室）や府民の方も御利用いただけるレストラン等が整備される予定です。

この施設の建設には、稲盛和夫氏（京セラ株式会社名誉会長）から20億円のご寄附をいただいています。施設名は、「稲盛記念会館」です。



教養教育共同化施設（仮称）完成イメージ図

京都府立大学、京都府立医科大学、京都工芸繊維大学の三大学が平成24年10月に設置した京都三大学教養教育研究・推進機構では、広く府民の皆さまに、全国初の試みとなる教養教育共同化の取組を紹介するとともに、今後の大学教育における教養教育の意義をあらためて問い直すこ

とにより、三大学の教養教育共同化を盛り上げる機運を一層促進するため、三大学教養教育共同化フォーラムを開催しました。

教養教育共同化の開始後もこうした取組を進めていく予定ですので、府大関係の皆様方もご期待ください。

三大学教養教育共同化フォーラム『不安を楽しめ!』講演：鴻上尚史氏

平成25年11月16日(土)府立大学の学園祭「流木祭」において、京都府立大学同窓会・後援会・校友会共催のもと、三大学教養教育共同化フォーラム「不安を楽しめ!」を開催しました。

フォーラムは、府立大学の卒業生でプロのトランペット奏者であるTOMMYさんとピアニストである上村美智子さんによるジャズ演奏で幕を開けました。

続いて、講師としてお招きした作家・演出家でテレビ番組の司会やラジオ番組のパーソナリティ、テレビドラマの脚本等でも活躍の鴻上尚史氏に講演いただきました。

当日参加いただいた学生からOB等の年配の方まで約300人もの聴衆を魅了する鴻上氏のユニークな語り口に何度も笑い声がわき、終始和やかな雰囲気の中、三大学の学生たちとのトークセッションも交え、不安を楽しむ生き方のヒントなどが語られました。

鴻上氏の講演から—世間と社会—

日本人は世間—自分にとって利害・人間関係が生じる空間—には気を使うが、社会—自分とは直接関係のない人々—には気を使わない民族。世間に捉われて不安を感じるのはそのどこにどっぷり浸かっているための思考停止状態であるからといえる。

この数十年の間に大きな会社がいくつもつぶれた。今や大体3年くらいの周期で不安になって当たり前。クリアに未来が見える方がおかしい。

今こそ「不安とつきあう」技術を磨き、その根源へのアプローチを試みるべき。

三大学教養教育共同化フォーラム「『教養の時代』がやってきた」

基調講演 池上彰氏 / パネルディスカッション 桑子敏雄氏・池上彰氏・築山崇副学長

平成26年1月25日(土)キャンパスプラザ京都において、三大学教養教育共同化フォーラム「『教養の時代』がやってきた」を開催しました。

平成24年4月にリベラルアーツセンターを開設した東京工業大学からセンター長の桑子敏雄教授とリベラルアーツセンターで教鞭を執られている池上彰教授(ジャーナリスト)をお招きしました。

フォーラムは、池上教授による基調講演、それを受け、池上教授に加え、桑子センター長、築山副学長(京都三大学教養教育研究・推進機構運営委員長)によるパネルディスカッションの2部構成で行いました。

会場は、事前申込により参加いただいた約250人の府民・市民の方々に埋め尽くされ、質問とともに、「積極的寄り道・回り道の勧め」や、現代の学生に求められる資質などについての池上教授のお話への共感、三大学の共同の取組みへの期待・要望など多数の感想・意見が寄せられました。

池上教授の講演から

—最先端ではなく、やがて役立つものを—

現代は、グローバルな競争環境のもとで先端的研究に関心が集まりがちであるが、マサチューセッツ工科大学などでは、「最先端」は、先端であるがゆえにすぐに陳腐化する宿命にあるので、「最先端を教える」のではなく、「自ら生み出す力を育てる」ことを重視している。

そして、「即戦力」重視が叫ばれる一方で、日本人は与えられた条件の下で成果を出すことには長けているが、条件や環境そのものを創造することは不得手であり、コンピューターに例えるとOS上のアプリのようになってしまうのではないかと。

小泉信三氏の「すぐに役に立つものは、すぐに役に立たなくなる」という言葉があるが、「やがて役に立つもの、リベラルアーツ」が大事ではないか。

特集2

■ 男女共同参画の取組 ■

男女共同参画推進室 コーディネーター 鈴木 暁子

男女共同参画推進室を創設し、女性研究者研究活動支援事業を始めました

今年度、本学では、男女がともに活躍できる研究・教育機関の実現をめざし、男女共同参画推進委員会を創設し、研究・教育の場や、地域貢献及び大学運営において、男女共同参画を進めるための取り組みを始めました。

また、女性研究者、院生、学生のための支援プログラムが文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」に採択され、2013年度から3カ年、男女共同参画推進室を拠点に、女性研究者をサポートする事業も始動しています。

全国平均を下回る、本学の女性教員の割合

日本における女性研究者の割合は OECD 加盟国中、最も低い水準にあります。

京都府立女子専門学校を前身とする本学は、京都府下における女子高等教育の先駆的役割を果たし、女性の社会進出をリードしてきたこともあり、学部生 1,838 名のうちの6割を女性が占めますが、女性常勤教員の比率は 16.7% (26名) と、全国平均 (20.2%) *より低く、また教授職の比率は 13.2% (9名) となり、さらに低くなります。

*2012年度文部科学省「学校教員統計調査」

京都府立大学における女性教員の割合

区分 所属	教授			准教授			講師			助教			計			女性割合 (%)
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	
文学部	18	15	3	11	8	3	6	5	1	0	0	0	35	28	7	20.0
公共政策学部	10	9	1	13	10	3	3	2	1	0	0	0	26	21	5	19.2
生命環境科学研究科	40	35	5	30	27	3	15	11	4	10	8	2	95	81	14	14.7
教員計	68	59	9	54	45	9	24	18	6	10	8	2	156	130	26	
女性割合 (%)	13.2			16.7			25.0			20.0			16.7			

基準日：2013年4月1日

両立支援のための環境整備の必要性
～「府立大学男女共同参画意識調査」から～

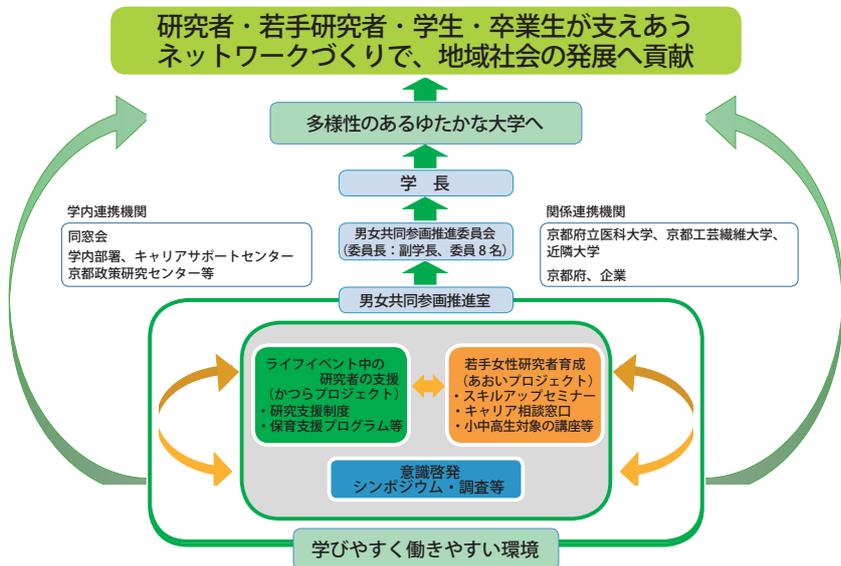
女性教員比率の低いことの要因のひとつは、出産・育児・介護等のライフイベントと研究活動との両立の難しさです。出産・育児・介護等は女性への負担が大きく、本学の男女共同参画推進準備委員会が2013年2月に常勤教員を対象に行った「京都府立大学男女共同参画意識調査」でも、「本学における男女共同参画に必要なこと」として、第1位育児支援、第2位意識改革、第3位ワーク・ライフ・バランス支援が挙げられています。本学においても、男女が共にその能力を最大限発揮できるよう、出産・子育て等と研究を両立するための環境の整備が求められています。

男女共同参画推進室の取り組み

上記の現状を踏まえ、今年度より、男女共同参画推進室では、文部科学省「女性研究者研究活動支援事業」を中心に、下記の3つの事業を行っています。1つ目の研究者支援事業(かつらプロジェクト)は、ライフイベント中の研究者を対象としており、研究支援員の配置、保育支援プログラム等の両立支援を行っています。2つ目の若手研究者支援事業(あおいプロジェクト)は、若手女性研究者(研究員、オーバードクター、ポストドクター、大学院生)を対象に、キャリア形成の支援を行います。3つ目の意識啓発活動は地域社会との連携により、男女共同参画の推進に向けた啓発活動を行う予定です。

こうした取り組みを通して、性別を問わず、研究しやすい働きやすい、多様性を認めあったゆたかな大学をめざしていきます。

事業責任者：副学長・男女共同参画推進室長 東あかね
事業担当者：男女共同参画推進室コーディネーター 鈴木暁子
【連絡先】
男女共同参画推進室
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5 (1号館3F)
TEL :075-703-5143 (直通) E-mail :danjo@kpu.ac.jp
URL :www.kpu-sankaku.jp



トピックス

■ 地域連携・地域貢献 ■

南丹市と連携協力包括協定を締結

南丹市との連携・協力の取組を今後一層推進するため、平成 26 年 1 月 31 日に連携協力に係る包括協定を締結しました。

南丹市は、京都府のほぼ中央に位置し、府南北の文化・経済の交流拠点として、健康増進、環境保全、文化・観光の振興などに積極的に取り組まれています。また、豊かな自然資源を有し、本学の附属施設である大野演習林（美山町）、日吉演習林（日吉町）があり、学生の野外実習や学生・教員の研究のフィールドにもなっています。

南丹市と本学は、これまでから、本学の地域貢献型特別研究（ACTR）を活用して、健康増進施策の企画・評価、中山間地域の農地保全・地域活性化などの共同研究を実施するとともに、地域文化セミナーの共催、市民参画推進の活動に協働してきました。

本学は、府民の大学として、地域貢献、地域振興を大学の理念の一つに据えて、教育・研究活動を行っており、この連携協力包括協定を結ぶことにより、幅広い分野で南丹市の課題に対応するとともに、府の南北を繋ぐ南丹地域の更なる発展に貢献していきたいと考えています。



包括協定で握手する佐々木南丹市長（左）と渡辺学長

包括協定では、今後、次の事項について連携協力をさらに進めていくこととしています。

- (1) 保健・福祉の充実に関する事項
- (2) 食育に関する事項
- (3) まちづくりの推進に関する事項
- (4) 人材の育成に関する事項
- (5) 産業振興に関する事項 等

連携協力包括協定の締結にあたり、佐々木稔納 南丹市長からメッセージをいただきましたので、御紹介します。

魅力ある地域づくりのパートナーとして

南丹市長 佐々木 稔納

(敬称略)

京都府立大学は、明治 28 年に創立された京都府簡易農学校に源を発する京都府における「人と知（地）の拠点」として、次代を担う人材の育成と地域社会の発展に大きく貢献されています。



南丹市においても以前より市民の健康増進に向けた調査研究や行政改革などの分野で府立大学と協働した事業を進めてまいりましたが、今後も大学に少子高齢化や定住促進などの地域が抱える様々な課題に関わっていただくことが新たなまちづくりの仕組みを築くことにつながると考えています。

本市が目指す「大学等と連携し、ともにまちをつくる」を進めていく上でのパートナーとして、今回の連携協力包括協定の締結を契機にこれまで以上に密接に連携・協力し、活力にあふれる個性豊かな魅力ある地域づくりと学術の振興を図ってまいります。

林野庁近畿中国森林管理局と連携協力に関する協定を締結

本学と林野庁近畿中国森林管理局は、それぞれの人材、資源、フィールドや研究データ等の活用を図りながら、生物多様性の保全をはじめとする森林の有する多面的機能の持続的発揮、森林資源の有効利用、森林・林業の再生及び地域の振興に貢献するための調査研究、人材育成等の促進を図ることを目的に、平成 25 年 11 月 26 日に連携と協力に関する協定を締結しました。

【協定締結により、今後期待される連携した取組】

- (1) 歴史都市・京都の景観形成に寄与する森林づくり
- (2) 世界文化貢献の森林など「木の文化」の管理（施業）に関する研究
- (3) 地域の森林・林業の再生に向けた取組に関する支援
- (4) 国有林の有するデータの科学的分析と結果の反映

- (5) 本学が取り組む各種研究フィールドとしての国有林の提供
- (6) 人材育成の取組



協定書を披露する前川泰一郎局長（左）と渡辺学長

国際交流

学部（研究科）間で学術交流協定を締結

レーゲンスブルク大学（ドイツ連邦共和国）

2013年11月15日、レーゲンスブルク大学言語コミュニケーションセンター・ドイツ語外国語教育科長トーマス・シュタール博士が本学に来訪されました。学長、副学長らの立ち会いのもと、野口祐子文学部長が協定書2通にサインしました。シュタール博士は2通の協定書をレーゲンスブルクに持ち帰り、後日センター長アナタ・シルヒャー教授のサイン入り協定書一通が本学に送り届けられ、国際交流協定が成立しました。



トーマス・シュタール博士（左）と野口文学部長

レーゲンスブルクは日本では知名度の低い都市ですが、南ドイツバイエルン州の東部に位置します。アルプスに水源をもつドナウ川が東へと向かうなかで、もっとも北に湾曲した部分にあたります。2006年には旧市街全体がユネスコの世界遺産に登録されました。また、都市の成立もきわめて古く、紀元90年ごろにはすでにローマ人によって城塞が作られました。この遺跡の一部は今日なお目にすることができます。6世紀にはゲルマン人がこの地域を支配するようになり、この街は12世紀ごろから最初の繁栄期を迎え、美しい石橋や大聖堂が作られました。17世紀中葉には神聖ローマ帝国議会が開かれるようになり、皇帝の居所はウィーンでしたが、ナポレオンに占領されるまで第二の都として機能します。そんなわけで、神聖ローマ皇帝カール5世、画家アルブレヒト・アルトドルファー、天文学者ヨハネス・ケプラー、詩聖ゲーテ、バイエルン王ルートヴィヒ2世などがこの街と浅からざる因縁を持っています。

大学の創立は意外に新しく1962年のことです。学舎は当時流行し始めた反権威主義教育思想に基づき、正門も扉もない開放的な構造です。学部はカトリック神学部、法学部、経済学部、医学部、言語・文学・文化学部、数学部、物理学部など11学部からなります。とくに物理学部はドイツにおいても有数の業績を残しています。また、前ローマ教皇ベネディクト16世は、近隣の出身で、レーゲンスブルク大学で教鞭をとっていました。現在18,500人の学生が在籍しており、そのうちの1,370人が外国からの留学生です。これら留学生教育の初期において、重要な役割を担っているのが、「学生サポート部」に属する言語コミュニケーションセンターです。

文学部欧米言語文化学科を中心とした学生たちは、2011年度よりこのセンターが主催するインターナショナル・サマー



レーゲンスブルク大学

コースに参加し、8月のひと月を過ごしています。これまで3年間、平均20名ほどの学生が、日本の夏とは違い、30度を超える日が数えるほどしかない快適な環境で、ドイツ語の勉強に打ち込んできました。また、授業が終わってからはレーゲンスブルクの古い町並みを散策したり、無数に点在するビアガーデンやイタリアレストランで舌づつみを打ったりします。さらに休日には近隣の観光地や大都市をめぐる、多くの異文化と出会い、その体験を咀嚼、吸収しています。

さて、この協定の一環として、2014年度からトーマス・シュタール博士が、本学に集中講義において下さいます。また、レーゲンスブルク大学の言語コミュニケーションセンターに2014年度からビジティング・スチューデント制度がつけられ、1セメスター530ユーロ（約七万円）の授業料でドイツ語を学べます。早速、本学の数名の学生が希望しております。今後はレーゲンスブルク大学の学生を本学で受け入れる仕組みを作りながら、いっそう協定を充実させたいものです。どうぞご支援をお願いいたします。

（文学部欧米言語文化学科 教授 青地伯水）

ガーナ大学（ガーナ共和国）

生命環境科学研究科とガーナ共和国のガーナ大学農業消費学部は、2機関相互の友好関係、学術研究そして教育上の協力を目的として、2013年10月14日、学術交流協定を締結しました。

ガーナ大学とは、2010年から教員間交流が始まり、相互訪問、共同研究などの交流が進められています。

アフリカ熱帯雨林では、新規の機能性を持った生物試料を得られる可能性が高く、今回の協定締結により、機能性資材を研究材料とする多くの本学教員、大学院生の研究が推進されることが期待されます。

学術交流協定先との交流 —西安外国語大学（中国）—

西安外国語大学とは、教員の相互受入、日本語講師として本学大学院生を派遣するなどの交流を行っています。

今年度、本学に来られた西安外国語大学の教員、本学から派遣した大学院生からのメッセージを紹介します。

西安交換教員からのメッセージ

文学部日本・中国文学科 張新藝
（西安外国語大学交換教員）

私は京都と縁が深いと思います。今回が3回目となった京都の到着は桜が見ごろの時でした。京都に来る度に桜や紅葉の好季節に恵まれて、非常に喜ばしいです。

休むまもなく、京都府立大学での中国語の授業が始まりました。懐かしい京都を楽しみながら、自転車に乗って縦横に交差

した大通りや曲がりくねった路地を走り、キャンパスと公舎の間を往復することがほとんど日課となりましたが、道中の散在する神社やお寺が目に入ると、自分の京都暮らしを守ったり励ましたりしてくれるかのように感じられます。

緑豊かなキャンパスに身を置き、いいにおいがする書籍に囲まれ、学生諸君の強い向学心と部活・サークル活動の元気に激励され、また豊かな人間性と高度な専門性を備えた先生方の立派な風采を直接に見聞きすることができます。この自然と人文環境のバランスのよい調和はなんとすばらしいだろう。

いつのまにか一年がたち、私は京都府立大学での仕事に終止符を打ちますが、感謝の気持ちで胸がいっぱいです。小松謙先生、林香奈先生、伊藤顯さんからいろいろな配慮を受けたこと、文学部の先生方との研修合宿や忘年会の食事交流のおかげで、日中両国の共通点と差異点への理解も深まったこと、優秀な日

本人学生への中国語の教授を通じて、教学活動をも思う存分に楽しめたことなど、いろいろご指導ご協力、ありがとうございました。

微力でありながら、これからも両大学の更なる交流のために尽くしていきたいと思っています。

西安より（派遣院生からのメッセージ）

西安外国語大学派遣院生 奥野 昂人
(文学研究科国文学中国文学専攻)

私は今、西安外国語大学で日本語教員として働いています。中国の学生はよく学習し、私も大いに刺激を受けています。休

暇中には学生の故郷を訪ねたり、自分の研究を進めたりするなど有意義に過ごすことができました。

近年、中国と日本の関係は良好とはいえません。テレビのニュースなどを通じて間接的にそれを感じることがあります。しかし、政治は政治であることを皆理解しています。寧ろ、中国の人は友好的で外国に関する興味が大きいようです。

このようなことは実際に現地を訪れてみて、肌で感じなければわからないことです。様々なことを感じ取れた今、一人でも多くの「日本のファン」を作れるように、仕事に取り組みたいと思います。

公開講座・生涯学習

公共政策学部 府民公開講座 山田知事と増田客員教授（元総務大臣）による対談 「自治体のトップは、今、何を考えているのか？～地方自治の真価～」

平成 25 年 11 月 2 日（土）、毎年恒例の府民公開講座『山田啓二京都府知事と増田寛也客員教授による対談（主催：公共政策学部）』を開催し、府民、学生併せて約 150 名の参加があった。

本講座の魅力は何といっても「地方自治のトップランナー」のお話を直接見聞できることであろう。というのも、山田知事は京都府のトップであるだけでなく、現在全国知事会会長であり、増田先生も若手県知事を務められた後、総務大臣を経験された方。つまり、お二人とも日本を代表する地方自治のリーダーかつプロフェッショナルであり、このような公開型の対談企画は本学以外ではなかなか見ることができないからである。

当日は、まず山田知事から『地域の再生、日本の再生』をテーマに、少子高齢時代の未来予測、介護・福祉・医療をつなぐ試み、facebook など SNS を活用した府民参加のあり方など、現在進行形の京都府の重要施策について講演があった。続く対談では『地方自治の真価』をテーマに、



「この 20 年間の地方分権改革をどのように総括するか？」など、増田先生から山田知事に質問を投げかける形式で対談が進められた。そして、最後は山田知事からの「今日は悲観的な話も多くしたが、未来は変えられる。皆さんの手でぜひ変えて欲しい」との熱いメッセージで会が締めくくられた。

参加者のアンケートでは「住民は観客であってはいけなくてという知事の言葉が今の私に言われているようで、強烈に印象に残った」「私も府民として自分のできることを見つけて京都に貢献していきたい」など、前向きな感想が多く見られた。このことから参加者の満足度も相当高かったことを窺い知れる。



ともあれ、こうした地方自治の最前線を知れる企画が実現できるのも本学部ならではの強みである。今後も府大発で“公共政策の近未来図のあり方”を考える場づくりに貢献していきたい。

（公共政策学部公共政策学科講師 杉岡秀紀）

生命環境科学研究科シンポジウム 「連携から生まれる商品化とイノベーション ―先端研究を“日常”へ―」

生命環境科学研究科では、本学地域連携センターと共催で、毎年府民向け公開シンポジウムを行っています。本年度は、京都市産業技術研究所（以下産技研）の後援を得て、平成 25 年 12 月 14 日（土）に京都リサーチパーク KISTIC 棟 会議室で、「連携」、「商品化」、「イノベーション」をキーワードに、本研究科と産技研の連携から生まれた商品化実例を中心に紹介する形で実施しました。

シンポジウムでは、東あかね副学長兼地域連携センター長から開会の挨拶を頂いた後、本学 2 名の教員から、食品開発を目指したお米の分析法の開発と脂肪酸分析キットの開発について、産技研からは、大学の知から生まれた新戦略―京都市産技研の産学公連携―と題して研究内容を紹介して貰いました。

さらに、佐々木酒造と小川珈琲から、連携から生まれた新しい飲料、そして産学公連携による新戦略―珈琲&スイーツという題で、実際に商品化されたもの（佐々木酒造のノンアルコール飲料「白い銀名水」と小川珈琲の米糰（こめこうじ）を原料としたスイーツ「糰乃菓（このか）」）を試食（飲）しながら、開発秘話も含めて紹介して頂きました。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、「基礎研究から新商品へ―連携の意味と期待―」というテーマで、講演者を中心に議論を行いました。

その結論として、地域の企業が持つ様々な技術が、大学や公的研究施設との連携によって新しい商品開発につながることで、そして本学の持つ研究の底力と産技研の持つコーディネート力や強力なユーティリティとの融合が独創的なイノベーションに繋がることが再認識されました。そのためには、産学公が、それぞれの長所を生かす最善の努力をそれぞれの場で継続しつつ、気軽に連携していける環境と人づくりの重要性も指摘されました。

（生命環境科学研究科応用生命科学専攻教授 渡部邦彦）

受賞情報

Public Policy

公共政策学部 森 悠さん 島崎 梨奈さん
原田 峻輔さん 小牧 満也さん
京都から発信する政策研究交流大会「優秀賞」受賞

公共政策学科 杉岡秀紀ゼミの2回生のチームが、「第9回京都から発信する政策研究交流大会」(主催:大学コンソーシアム京都)における発表で、「優秀賞」を受賞しました。

【発表テーマ】

『地域まるごと写ガール隊～京都丹波の地域力向上に向けて～』

Life and Environmental Sciences

生命環境科学研究科 佐藤 茂 教授
Outstanding Researcher in
Postharvest Horticulture 受賞

応用生命科学専攻の佐藤茂教授が、ISHS (国際園芸学会) の Commission Quality and Postharvest Horticulture (品質と収穫後の園芸学委員会) が所管するシンポジウムにおいて、Outstanding Researcher in Postharvest Horticulture (収穫後園芸分野における傑出した研究者) を受賞されました。

生命環境科学研究科 佐藤 健司 教授
「科研費」審査委員表彰 受賞

応用生命科学専攻の佐藤健司教授が、独立行政法人日本学術振興会の平成 25 年度「科研費」審査委員の表彰を受賞されました。

生命環境科学研究科 大谷 貴美子 教授
「ひらめき☆ときめきサイエンス推進賞」受賞

応用生命科学専攻の大谷貴美子教授が、独立行政法人日本学術振興会「平成 25 年度ひらめき☆ときめきサイエンス推進賞」を受賞されました。

生命環境科学研究科
吉富 康成 教授 浅田 太郎 特任准教授
加藤 亮太 特任研究員 田伏 正佳 准教授
The International Conference on Artificial
Life and Robotics 「最優秀論文賞」受賞

環境科学専攻情報伝達システム学研究室および知能情報システム学研究室の教員が、The International Conference on Artificial Life and Robotics (人工生命とロボット工学に関する国際会議) において、「最優秀論文賞」を受賞されました。

【受賞論文タイトル】

「Method of Facial Expression Analysis Using Video Phone and Thermal Image (テレビ電話と温度画像を用いた表情分析法)」

生命環境科学研究科 中尾 淳 助教
「日本土壤肥料学雑誌論文賞」受賞

応用生命科学専攻の中尾淳助教が、2013 年度日本土壤肥料学会「日本土壤肥料学雑誌論文賞」を受賞されました。

【受賞論文題目(著者)】

「カリウム飽和・乾湿処理によるスメクタイト質土壌のセシウム保持能の向上とその持続性: スメクタイト質土壌とアロフェン質土壌の比較」

(中尾淳(京都府立大学)、武田晃、塚田祥文(環境科学技術研究所)、舟川晋也(京都大学大学院地球環境学堂)、小崎隆(首都大学東京))

生命環境科学研究科 中西 研太郎 さん
生命環境学部 鹿取 茜 さん
有機π電子系シンポジウム「ポスター賞」受賞

機能分子合成化学研究室の中西研太郎さん(応用生命科学専攻博士前期課程2回生)、鹿取茜さん(生命分子化学科4回生)が、有機π電子系学会第7回有機π電子系シンポジウムにおいて、「ポスター賞」を受賞しました。

【受賞演題】

「扇状湾曲π系化合物の合成と機能評価」(中西さん)
「新規ベンゾキサンテン色素の合成と性質」(鹿取さん)

生命環境科学研究科 松下 智久 さん
農薬デザイン研究会「最優秀発表賞」受賞

応用生命科学専攻(機能分子合成化学研究室)博士前期課程1回生の松下智久さんが、日本農薬学会の学術研究会である第28回農薬デザイン研究会において、「最優秀発表賞」を受賞しました。

【受賞演題】

「医薬業結合タンパク質の網羅的回収を指向した機能性樹脂の開発」

生命環境科学研究科 小玉 紗代 さん
糸状菌分子生物学コンファレンス
「学生優秀ポスター発表賞」受賞

応用生命科学専攻(植物病理学研究室)博士前期課程2回生の小玉紗代さんが、糸状菌分子生物学研究会の第13回糸状菌分子生物学コンファレンスにおいて、「学生優秀ポスター発表賞」を受賞しました。

【受賞題目】

「Uri類炭疽病菌における出芽酵母 RAM ネットワーク構成因子 CoPag1 は植物特異的シグナル受容を介した付着器形成に関与する」

生命環境科学研究科 深田 史美 さん
Australasian Plant Pathology Society
Conference
BEST STUDENT POSTER AWARD 受賞

応用生命科学専攻(植物病理学研究室)博士前期課程2回生の深田史美さんが、the 19th Australasian Plant Pathology Society Conference において、Best Student Poster Award (学生最優秀ポスター発表賞) を受賞しました。

【受賞題目】

「CoBub2-CoBfa1 complex, a component of mitotic exit network regulator in *Saccharomyces cerevisiae*, is required for interphase cell cycle progression and pathogenesis in *Colletotrichum orbiculare*」

生命環境科学研究科 吉村 亮二 さん
日本アミノ酸学会 学術大会
「優秀ポスター賞」受賞

応用生命科学専攻(分子栄養学研究室)博士後期課程1回生の吉村亮二さんが、日本アミノ酸学会 第7回学術大会において、「優秀ポスター賞」を受賞しました。

【受賞演題】

「迷走神経を介したロイシンの摂食抑制作用」

生命環境科学研究科 畑澤 幸乃 さん
日本栄養・食糧学会 近畿支部大会
「若手奨励賞」受賞

分子栄養学研究室の畑澤幸乃さん(特別研究学生)が、第52回日本栄養・食糧学会 近畿支部大会において、「若手奨励賞」を受賞しました。

【受賞演題】

「マウス骨格筋における転写共役因子 PGC-1 α による BCAA 代謝調節」

生命環境科学研究科 清野 珠美 さん
日本食品科学工学会 若手の会「企業賞」受賞

応用生命科学専攻(食品科学研究室)博士後期課程3回生の清野珠美さんが、日本食品科学工学会第60回記念大会における第9回若手の会ポスター発表において、「企業賞」を受賞しました。

【受賞題目】

日本酒由来新規大腸炎抑制ピログルタミルペプチドの同定

生命環境科学研究科 尾垣 ちさと さん
日本家政学会関西支部「若手優秀発表賞」受賞

応用生命科学専攻(食事科学研究室)博士前期課程2回生の尾垣ちさとさんが、日本家政学会関西支部第35回研究発表会において「若手優秀発表賞」を受賞しました。

【受賞題目】

「機械収穫で生じた規格外京都納言小豆の有効利用」

各学部・研究科の取り組み

文学部

れいぜいけ しぐれてい

冷泉家時雨亭文庫の調査と影印の刊行

日本・中国文学科 赤瀬 信吾 教授

冷泉家邸内の御文庫には、国宝や重要文化財に指定されている古写本が数多くのこされている。冷泉家時雨亭文庫の調査主任をつとめて、25年ちかくが過ぎた。1992年12月から2009年1月にかけて、貴重な古典籍や古文書を影印（写真版）にして、冷泉家時雨亭叢書と名づけ全84巻を朝日新聞社から刊行した。

藤原定家の日記『明月記』（国宝）も、そのひとつ（写真）。定家が監督して書写させたもので、定家自筆の部分も多い。これまで多くは江戸時代の転写本を活字にした国書刊行会本で読まれてきたが、誤字が多く意味を把握するのに難渋した。それに対して、定家監督書写本によって読むと、意味不明な箇所が格段と少なくなる。叢書の刊行と並行して、『明月記』の研究会を行ない、活字化したものを叢書別巻として刊行しはじめている。全3巻のうち第2巻を、今年早いうちに刊行する予定だ。

叢書に収めることのできなかった古典籍も影印にして、あと16巻くらい刊行する準備を進めている。どうして収録し忘れたのだらうと、自分でも不思議に思うような鎌倉時代に書写された歌集が、まだまだ残されている。叢書の刊行は日本古典文学の研究の質を変えたけれども、なお追加すべきものは多いのである。



公共政策学部

財産権の制限と損失補償

公共政策学科 下村 誠 准教授

「補償の要否」の問題

憲法は財産権を保障する一方で、正当な補償と引き換えに、公共のために私有財産を用いることを認めています。例えば、公共事業のために土地が収用された場合には、当該土地所有者に損失補償が支払われます。この例のように財産権（土地所有権）が奪われた場合に補償が必要なのは当然ですが、財産権が「制限」されたに過ぎない場合に補償が要るかは難しい問題です。例えば、マイホームを建てようと思って購入した土地に規制がかかり、家を建てられなくなったとしたらどうでしょう。かなりショックですね。でも土地を奪われたわけではありません。あえて言うなら「夢」を奪われました。では、2階建てまでしか建てられなくなったとしたらどうでしょう。先ほどの例より制限の「程度」は軽くなっています。それでも補償は要るのでしょうか。私は、この補償の要否の問題を、アメリカと比較しながら研究しています。

どうやって判断する？

この問題は、結局のところ、様々な要素を考慮して判断せざるを得ません。その際考慮されるものとして、規制目的と規制程度があります。マイホームを建てられなくなった例を

思い出して下さい。なぜその土地に家を建ててはいけなかったのでしょうか。その土地が河川付近にあって、洪水時に浸水する氾濫原であるから？それとも単に景観を守るため？同じ建築禁止でも規制目的によってずいぶん印象が変わると思いませんか。前者のように、公共の安全や秩序を維持するための財産権制限には、一般的に補償は要らないと言われています。しかし、規制目的が正当であるからといって、いかなる負担も個人に負わせてよいということにはならないでしょう。規制程度も重要なのです。



規制目的はもう不要!?

アメリカにも同様の問題があります。また、補償要否基準は、日本と本質的に同じと言われています。しかし、2005年に連邦最高裁が、補償の要否判断に規制目的は不要であると示唆し、学界を驚かせました。その理由を簡単に言えば、規制目的が正当なのは当たり前だ！ということでした。言われてみればその通りなのですが、本当にそれでよいのか。これが私の今の関心事です。

生命環境科学研究科

健康科学研究室の紹介

応用生命科学専攻 健康科学研究室
東 あかね 教授、和田 小依里 講師、青井 渉 助教

健康科学研究室では、人間の食生活や運動習慣と健康との関連を栄養疫学的方法および運動生理学的方法によって明らかにし、人々の健康増進と疾病予防から、健康な地域社会づくりをめざしています。

公衆栄養学分野

公衆栄養学分野（東研）では、地域のボランティアの方々とともに、軽症高血圧の男性を対象とした健康教育を毎年実施し、今年は14年目になりました。降圧剤を使わずに「適塩和食」による高血圧予防をめざして、見ても食べてもおいしい料理を自分で作って、その味を舌で体験していただいています。自宅では、毎日の食事、歩数、そして早朝尿からの塩分摂取量の記録をお願いし、自ら生活習慣の問題点の発見と解決に努めることが課題です。修了者は約90名となり、「健東会」という名の会を結成し、年に4回のウォーキングなどの自主活動に取り組まれています。

一方、京都市立小学校の栄養教諭の先生方と連携した研究は6年目で、東京水産振興会が開発された「さかな丸ごと探検ノート」の教材を活用し、京都市中央卸売市場が実施されている出前板さん教室の板前さん、栄養教諭、および担当が協働して、小学生を対象にした魚食の教育に取り組みました。和食離れを食い止め、子どもたちの将来にわたる健康増進に寄与したいと考えています。



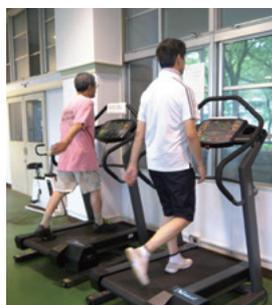
病態栄養学分野

病態栄養学分野（和田研）では、京都府立医大附属病院栄養管理課と共同研究を行っています。今年度は糖尿病内科の患者さんを対象に、炭水化物エネルギー比率に着目した栄養指導の効果を検証した研究を行いました。患者さんの食事記録を点検し、外来でパソコンに入力、栄養アセスメントを行って管理栄養士さんの栄養指導に活用していただきました。

また、日本酒由来ペプチドの炎症性腸疾患に対する予防効果について動物実験による研究、酵母由来セラミドのメラニン産生抑制効果、大腸がん抑制効果に関する細胞実験による研究を行っています。

運動生理学分野

運動生理学分野（青井研）は、骨格筋から分泌されるタンパク質として注目が高まっている、マイオカインについて世界をリードする研究を行っています。アントシアニン、アスタキサンチン等の抗酸化物質の摂取が運動後のエネルギー代謝や糖代謝に及ぼす影響に関する研究や、運動後の筋疲労を予防する研究を行っています。学部生2名、博士前期課程院生3名、後期課程院生1名が所属し、夏には院生全員がグラナダで開催された国際栄養学会に参加し、発表するなど多くの成果を挙げてくれました。



私たちの研究は主に人間集団を対象にしているために、教育研究に対する府民の方のご協力がなければ研究を行うことができません。地域の保健所、保健センター、病院、学校などで活躍する管理栄養士さんに、さまざまな形で、本研究室の教育研究活動を支援していただきました。それらの支えを元に、学生一人ひとりが、銘々の力を十分に発揮して、卒論、修士論文、博士論文をまとめて築立っていくことを有り難く誇りに思っています。

退職教員からのメッセージ

心の欲する所に従いて^{のり}矩を踰える

学長 渡辺 信 一 郎

1976年5月1日、田畑茂二郎学長から辞令をいただきました。爾来37年と11箇月、この間、府立大学の教職員の皆さん、学生諸君には大変お世話になりました。明日からの小さな抱負を述べて、感謝に代えたいと思います。

学長の3年間、新しい研究は封印しました。自由になるこれからは、学究三昧です。まずは52巻で止ったままの王先謙『後漢書集解』120巻の全文読破。すでに書きためてある割記とあわせて、王莽の評伝を書くのが狙いです。つぎに科研で始めた新旧両『唐書』食貨志の訳注を完成させること。あわせて宙づりになっている唐代後半期から北宋期にかけて

の財政史研究を再開します。また『通典』樂典7巻の訳注を作成しながら、古代樂制史の研究に再度挑戦したいと思っています。

孔子は、「七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず」と述べました。私は七十をこえても、心の趣くままに限界をのり越えていけることが理想です。健康の維持が大前提になりますが。



25年間の府大

生命環境科学研究科応用生命科学専攻 佐藤 健 司

京都府立大学にお世話になり25年になります。この度勤動により退職することとなりました。

府大とはこちらにお世話になる前から縁があり、大学院生の時に、府大交響楽団も参加している京都3大学オーケストラ（府大、医大、工織）にエキストラで演奏させていただいています（次の定期演奏会で演奏されるドボルザークの7番です）。その関係で入学式か卒業式でも演奏したことがあります。当時から3大学（楽）連携に係らせていただいています。この連携で音楽だけでなく医大、工芸繊維大の先生達とも交流でき、新しい手法や考え方に触れることができましたことは本当にありがたく、大きな財産になりました。

また平成元年に奉職したときに、当時の教授の河端先生に無理を言って買っていただいたHPLC（Shimadzu LC-9）が今でも現役で動いています。

研究室のスタッフ、学生さんとも楽しい思い出が多く、去りがたい思い出いっぱいあります。まだしばらくお世話になることも多いと思います。今度の勤務地も同じ京都市ですので、今後とも皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



翠 点

生命環境科学研究科環境科学専攻 尾崎 明 仁

本学環境デザイン学科に着任してから7年半の歳月が経りました。着任当初、当学科は住居系建築の色彩が強かったため、私の専門分野に関心を持つ学生はいるだろうかと半信半疑でした。私は、いわゆる工学系建築の「環境・設備」を専門にしています。特に、熱力学と熱・物質移動論を基にしたComputer Scienceや建築機能デザイン（エコロジー建築や省エネルギー建築など）を得意としています。簡単に言うと、快適性・耐久性・省エネ性などに優れた建築を、伝熱理論を駆使して科学的に設計するという事です。専門的には、建築各部の熱流や物質流などを位置や時間を含む変数として偏微分方程式で表現し、それを実行可能なプログラムコードに変換して、気象条件（境界条件）の基で解いて居住環境を評価するという事です。

意匠デザインを設計と考えている学生に、このような設計方法は理解されるだろうかと心配しましたが杞憂にすぎませんでした。当初から興味を持つ熱心な学生が多く、また国内外における研究機関との協働や研究発表が実を結び、在任期間中に学生は日本建築学会や空気調和・衛生工学会において優秀論文賞や発表賞を15回受賞しました。

本学では、学生の可能性や教育研究の楽しみを心から実感でき、さらに研究が開花したこと、充実した期間を過ごせたことにとても感謝しています。お世話になりました教職員の皆様に深く御礼申し上げます、別れの挨拶とさせていただきます。



長年の間、学生の教育や研究などの発展にご尽力をいただき、本当にありがとうございました。

※渡辺信一郎学長が任期満了をもって御退任の後には、公共政策学部の築山崇教授（現副学長）が学長に就任される予定です。

表紙の写真は、写真部の林 真さん（欧米言語文化学科2回生）に提供いただきました。ご協力ありがとうございました。

広報委員会広報誌編集部会

京都府大広報 ふたはの桂 No.173 京都府立大学広報委員会 2014.3.24 発行
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 TEL.075-703-5904 FAX.075-703-5149
Email kikaku@kpu.ac.jp